

2012年オーストラリア多文化主義政策 交流プログラムに参加して

(公財)北九州国際交流協会専務理事 高原 義弘

初夏のシドニーで

2012年11月、晩秋の色濃い日本を後に初夏のオーストラリアへ向かいました。シドニー空港から市内への電車に乗ると沿線にジャカラダの青い花が咲き乱れ、まぶしい日がさんさんと降り注いでいました。日本との時差はわずか+2時間ですが、季節は全く逆の南半球に来たことを実感。日曜日だったこともあり、観光名所のダーリングハーバーは多くの家族連れでにぎわい、水着姿でのんびり日光浴を楽しんでいる人もいました。私が宿泊したホテルはチャイナタウン周辺にあり、界隈はアジアをはじめ多種多様な国の人々や言葉でごった返し、本物のエスニック料理を楽しむこともできました。オーストラリアは実に人口の3割強が外国生まれというまさに多民族国家なのです。

プログラム参加の動機

私の住む北九州市では、2年前に「国際政策推進大綱2011～アジアと共に生き、成長するまちづくり～」を策定し、そのなかで「アジアのゲートウェイを目指した経済産業振興」、「世界に貢献し国際競争力を強化する国際協力」と並んで、「アジアにおける多文化共生先進都市を目指したまちづくり」を施策の重要な柱のひとつと位置づけています。「多文化共生」を単に増加する外国人住民への対応としてとらえるのではなく、地域活性化のための積極的な戦略としているところに特徴があります。

今回、クレアの豪州多文化主義政策交流プロ

ラムに参加するにあたっては、かつての「白豪主義」から「多文化主義」へと大きく舵を切って、今日の経済発展へ結び付けた実績と、国民の中に多文化共生の価値観がどのように定着しているのかをこの目で見たいと思いました。

この研修で学んだこと

このプログラムでは、ニューサウスウェールズ州政府、エスニックコミュニティ、職業訓練学校、小学校、自治体、州災害対策室、英語教育機関、日本語学校など多文化主義政策に取り組む現場を訪れ、関係者の生の声を聞くことによって、多文化主義の思想が深く根付いていることを理解することができました。また行政とNPO、地域社会が協働して多文化共生社会を支えている各種の事例に触れ、地域資源としての多文化共生の可能性をあらためて認識することのできた1週間でした。

広大な国土の割に僅少な人口という背景を持ち、第二次世界大戦後、とくにアジア諸国の急速な経済発展に対する危機意識もあって、オースト



ニューサウスウェールズ州政府教育コミュニティ省にて意見交換

ラリアでの労働力としての移民再受け入れが始まったことは、本格的な人口減少がこれから始まる日本にも参考になると思います。アングロサクソンから東欧、南欧、そして中東、アジアへと徐々に門戸を広げ、さまざまな試行錯誤の中で、一時的な経済メリットだけではなく、人種差別撤廃にまで踏み込んで体系的な政策を実現した豪州国民の英知と勇氣、そして移民の地位向上のために不断の努力をしたコミュニティリーダーたちの熱意に感動しました。

ハーストビル市ジェネラルマネージャーのヴィクター・ランピ氏に「白豪主義から移民受け入れへの政策転換による摩擦」についてお尋ねしたところ、正直に「本当に大変だった」とおっしゃいました。しかし同時に、「ヨーロッパでは必ずしもうまくいっていないが、オーストラリアでは大いに成功した」と胸を張って答えられたのが印象的でした。土地と資源に恵まれているという特殊事情もありますが、多文化主義によるメリットを享受するため、それに伴うコストは国民が等しく負担するという基本的な合意が形成されていることが大変うらやましいと思います。少子高齢化に悩むわが国では、残念ながら移民受け入れに関する基本法はもちろん、おおまかな国民的合意もいまだ形成されていません。今後、急速に労働力人口の減少が進む中で、移民受け入れの議論が本格化することが予想されますが、オーストラリアでの成功体験は日本国民にとって大いに参考になり、また勇氣づけられる事例になるでしょう。



ハーストビル市にて、地元先住民のパフォーマンス

プログラムの特長

このプログラムのことはクレアのメルマガで知りました。「多文化共生」という言葉にひかれ内容をよく読んでみると、今回から「現地集合、現地解散」になっており、航空券、宿泊先を自分で手配できることで、従来の団体渡航型に比べて経費をかなり節約することができました。また、地域国際化協会は旅費の1/2までの助成制度があるので便利です。

参加した各自治体などの皆さんは目的意識が高く、研修に対する姿勢も非常に積極的でした。クレアシドニー事務所ではこの多文化主義プログラムを看板事業にしており、日程の組み方も非常に効率が良かったと思います。また、シドニー事務所が長年培った信頼関係を、受け入れ機関の対応の良さの中にも随所に感じ取ることができました。豪州多文化主義についての講義と通訳担当のマット・ダグラスさんは、日豪双方の多文化共生に関する知識や語彙にも大変精通されていました。

むすび

このような円熟したプログラムと充実したスタッフに恵まれ、今回参加できたことは本当にラッキーでした。『自治体国際化フォーラム』の読者の皆さまやこれから地域で多文化共生に取り組む若い人たちにも、ぜひ当プログラムへの参加を検討されることをお勧めします。



ニューサウスウェールズ林野火災消防本部にて